



# 目次

第一章	あるいは勝利よりも難しきもの	7
第二章	国の売り方	87
第三章	愚かしき出会い	131
第四章	疲れ果てた老竜	202
第五章	偽竜決戦	235

### ニーズヴァシャル

悪竜ニーズヘッグ種の一体。  
過去に七勇者達と  
激闘を繰り広げた。

### セムト

かつて古神竜“ドラゴン”を  
倒した七勇者の一人。  
その生前の記憶は今も  
冥界に保管されている。

### クリスティーナ

“竜殺しの因子”を受け継ぐ  
絶世の美人剣士。  
ベルン男爵に叙された。

### ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の  
転生した姿。  
クリスティーナの下で  
故郷ベルン村の発展に  
取り組む。

### メルル

“アークウィッチ”の  
異名をとる大魔法使い。  
その力は人間の領域を  
超越しつつある。

### ディアドラ

妖艶な黒薔薇の精。  
面倒見の良さから  
皆に慕われている。

### セリナ

ラミアの美少女。  
古神竜の精気を得て  
ラミアという種を超えた  
強大な力を持つ。

### ドラミナ

元バンパイアクイーン。  
政治に精通し、  
クリスティーナの右腕として  
ベルン男爵領  
の運営を支える。

## 第一章 ————— あるいは勝利よりも難しきもの

暗黒の荒野に領土を持つ魔族の国家ムンドウス・カーヌス国と古神竜の転生者ドラランが属するアークレスト王国・ロマル帝国連合軍との戦争。

この三国の規模と軍事力を考慮すれば、百年を跨いでの大戦争になってもおかしくはなかったが、結果的には驚くほど短期間に決着を見た。

そして、この語り継がれていくであろう戦争の行く末が決したのは、ついこの夜のことだった。この三国はいずれも大陸有数の強国であり、国力、技術力、兵の数と質、その全てを高水準で備えている。

それでも、これまでに一国による大陸統一が叶わなかったのは、近い水準の強国が近隣に複数存在しており、大陸に覇を唱えるのは、どの国家にしても困難であったからに他ならない。

それでも抑えきれぬ闘争心のままに、万端準備を整えてアークレスト・ロマル両国との戦端を開

いたムンドウス・カーヌス国であったが、彼らの戦争計画は初めから躓<sup>じまつ</sup>いていた。

その一番の要因として、ロマル帝国最強の個である『十二翼将<sup>じふによくしやう</sup>』の活躍が挙げられる。

ただアークウィッチばかりが名を知られていたアークレスト王国においても、ベルン男爵領の持つ、あまりに異常な戦闘能力と技術力により、侵攻を食い止めていたのだ。

そうしている間にアークレスト王国は戦争の準備を終え、ロマル帝国も反撃の備えを進め、両国の同盟締結をきっかけとした反撃が始まり、この夜に戦争の決着を見るまでになったのだった。

まさかその決着の要因となったのが、少数の超精鋭<sup>ちやうせいけい</sup>による、魔王ヤーハームの首を狙った敵陣中枢への突撃だったとは、誰も予想出来なかつただろう。

その任務を課された精鋭は四名。

周辺諸国最強とかねてから評価されていた「アークウィッチ」メルル。

次代のアークウィッチと期待されるベルン男爵領のドラン・ベルレスト。

ベルン男爵クリステイナー・アルマディア・ベルン。

さらにドランの婚約者でありクリステイナーの秘書を務めるドラミナ。

彼らは、課せられた使命を概ね達成することに成功したのである。

この四名と、それを迎え撃つ魔王達の激闘はあまりに現実離れした様相<sup>さまそう</sup>を呈<sup>てい</sup>した。

それは、三国全軍の衝突よりもさらに強烈で、その力と力の激突に夜空は大きく震え、大地は

戦慄<sup>せんれつ</sup>くように揺れた。

特にアークウィッチがこの夜に使用した魔法の数々は、大陸に大穴を開けるか、場合によっては星の崩壊を招きかねない代物だったのだから、凄まじい。

大気は悲鳴を上げるように揺らめいて、その最後の決戦が、神話もかくやの激しさであるのを三国の諸兵に知らしめた。

+

誰よりも先にドラン達の戦いが終わったのを認識したのは、魔王軍との最前線で大暴れしていたセリナとディアドラである。

ドランの婚約者、そしてベルン男爵領の家臣としての立場を確立した二人は、同時にモレス山脈に住むラミア達の代表として、エンテの森の民の代表として、それぞれ今回の戦いに参加していた。

ドランから日常的に古神竜の精気と魔力を譲渡<sup>じやうた</sup>されている為、二人にはドランと精神的な繋がりがあがる。

その為二人は、魔王軍中枢での戦闘の最中<sup>さなか</sup>にほとぼはしるドランの力を感じ、分かり切っていたとはいえ、ドラン達の勝利を認識したのである。

実際にヤーハームを降した<sup>くだ</sup>のはドランではなく、クリステイナであったが、どちらにせよアーケレスト王国とロマル帝国の勝利には違いない。

同郷のラミア達の力を借りた超巨大な魔力で出来た巨大蛇——ジャラームを作り出し、魔王軍を相手に大暴れしていたセリナは、ドラン達の勝利を知り、晴れやかな笑みを浮かべる。

その笑顔は降り注ぐ星々の光が思わず吸い寄せられるような、輝かしい笑みであった。

「やった、やった、やりましたよ、ディアドラさん！ ドランさん達が魔王さんをやっつけました、そうに違いありません!!」

自ら作り出した超巨大蛇の頭部の中で、セリナは無邪気にはしゃいで、ようやく戦争の終わりが見えた喜びに浸っている。

必要があるから戦っているが、彼女の気性<sup>きせう</sup>からして、魔王軍との戦いに喜びや楽しみなど、砂粒<sup>すなつぶ</sup>一つ分もなかったのは想像に難<sup>かた</sup>くない。

しかし、それでもベルン男爵領でドランやクリスと笑い合う日々や、ジャルラの里の友達<sup>ともだち</sup>が他種族と交流する光景など、失いたくないものがあまりにも多かった。だからこそセリナはなけなしの勇気を振り絞って、これまでの戦いに参加したのだ。

セリナに話しかけられたディアドラも似たような気分であったから、安堵<sup>あんぶ</sup>したように力を抜いて微笑みを零す。

彼女もまた同胞<sup>どうぼう</sup>であるエンテの森の様々な草花や樹木の精達の力を束ね、魔王軍との最前線に黒薔薇<sup>ばら</sup>をはじめとした多くの植物を咲かせている。

ディアドラの魔力を核として作り出された植物達は、敵に絡みつき、有毒の花粉をまき散らし、味方には傷を癒す蜜や樹液を与え、時には盾となる。

それは危ういところを助ける攻防一体の生きた陣地、あるいは植物園として機能していた。

陸上戦艦<sup>りくじょうせんかん</sup>数隻が黒薔薇に絡みつかれて動きを止めるか、あるいは持ち上げられている光景は、本来、ディアドラレベルの精では不可能な力技だ。

しかし、心身に宿る古神竜の因子を使えば、今やディアドラは、一国を呪いの黒薔薇で覆いつくせるほどの規格外の黒薔薇の精へと変貌する。

彼女に勝る草花や樹木の精となれば、この惑星では五本のみ存在するユグドラシル達くらいのものである。

ドランとの出会いとそれから過ごした時間が、ディアドラを生まれ持った限界を遥かに超越<sup>ちゆうえう</sup>した規格外の存在へと押し上げている。

「分かった、分かったから。私にも感じ取れているわよ。分かっているわよ。分かっているわよ。結果が出るまでは、どうしても心配してしまうわよね。メルルもずいぶん好き放題魔法を撃っていたし、こちらの勝ちが変わらなくても、勝つまでにどんな影響が出るかと思ったけれど……星の寿命を縮める

ような悪影響もないようだし、よかったわ」

勝利という結果ではなく、その過程を危ぶんでいたというディアドラの発言に、セリナはそれはそうです、と同意を示して続けた。

「この前、ドランさんが注意していましたし、メルルさんも流石に同じ間違いを繰り返さないとと思うのですけれどお」

「どうも私達は彼女が間違える場面ばかりに遭遇しているからか、メルルをいまいち信用してないのよねえ。頼りになるのは間違いないし、意外と普通の善人だっというのも確かだけど、それを台無しにするくらいの大きさの欠点があるからねえ」

「良い人です、とは言い切れず、良い人なただけだって思わず言葉を濁にごしてしまうんですよね。メルルさんについては」

ドラン達に同行したメルルが、全力を出して戦っていい相手を前に、真の実力とまだまだ眠っていた潜在能力を爆発させたのは、つい先日さきひの戦いでのことだ。

その結果、大陸を破壊するような、いや、惑星に甚じん大な被害をもたらしかねない高度かつ強力な魔法を連射する可能性を、ドラン達は危き惧ぐしていた。

ドランに散々釘を刺されていたから、そこまで安易な真似はしないとセリナもディアドラも信じてはいたが、完全に信じ切れない危あやうさがあるのが、メルルという女性だった。

世界最強の魔法使いバストレル亡き今、彼女はこの星の人類としては間違いなく最強の魔法使いである。

しかし、彼女は人並みの良識と感性を持ち合わせているはずなのに、時々、危あやうい一面を覗かせるから、ドラン達を少しだけ困らせている。

もつとも同族はもちろん、アークレスト王国やロマル帝国の諸兵から見て、セリナとディアドラも、実力の凄まじさで言えば大概たいていではあった。

両者共に単独で万軍ばんぐんを壊滅たいめつさせられる力を持った超常の存在であるのに、本人達はあまり自覚がないのである。

もしドランと出会うことなく、縁を結ばずにいたら、二人はそれぞれの種族の限界の範囲内に収まっていただろう。

セリナとディアドラがドラン達の勝利を敏感びんかんに悟ったのに対し、この場にいた魔王軍の兵士達はやや遅れてから、本陣中枢で自分達の主君と圧倒的強者である『魔六将まろくしょう』の敗北の報せを受け取ったようだった。

最前線はもちろん魔王軍の陣容しんじゆう全てで小さくない動揺が広がり、それまで一糸乱れぬ組織立った戦い方をしていた彼らは前進を止め、驚くほどの速さで後退を始める。

クリステイナーに従って敗北を認めたヤーハームの戦闘停止命令が、迅速じんそくに前線にまで伝わった

のだ。

軍隊としての情報伝達の速さや徹底された規律に関しては、魔王軍がロマル帝国とアークレスト王国よりも先を行っている、両国の将軍達も苦い顔を浮かべながら認めるところだ。

脱兎の勢いで後退する魔王軍に対して、両国の将軍達は咄嗟に追撃の命令を下せなかった。

何故なら魔王軍の兵士達はまだまだ余力を残しており、こちらが慌てて追撃を仕掛けた矢先に反転し、強烈な攻撃を加えてくる可能性は充分に考えられた。さらに、何かしら用意した罫や伏せた陸上戦艦などの類から砲撃を加えられる危険性もあり得たからだ。

慌ててその場を逃げ出していたならまだしも、組織だった動きで前線を下げる優秀な魔王軍に対してあらゆる可能性を考えてしまい、両国の将軍達は命令を下すのに時間を要したのである。

だがこの場で追撃を仕掛けなかったのは、正解だった。

魔王軍の諸兵は後退の命令には従うが、追撃を仕掛けてきた相手に反撃するなどとは命じられていない。

セリナとディアドラはあくまでベルン所属であるから、アークレスト王国が追撃を仕掛けるとしても、それに従う必要はない。これは事前にアークレスト王国王太子スペリオンから許可を得ていることだ。アークレスト王国軍が功績を焦って、セリナとディアドラ抜きで追撃を仕掛けたとしても、待っているのは苛烈な反撃による不必要な死傷者の大量発生という結果しかない。

ロマル帝国の指揮を執る皇女アステリアもそれを読み取って追撃を厳しく禁じ、十二翼将にも警戒を命じて、待機指示を出して休憩を取らせている。

あるいは護衛として控えている、ドランの分身体であるグヴェンダンやリビングゴールのリネットの様子の変化から、魔王軍の異常を読み取っていてもおかしくはない。

アステリアはそれだけの異常とも言える知性と洞察力を兼ね備えた少女であった。

「幸い魔王軍を追いかける者は味方にいないわね。もし攻撃を続けるようなら、無理にでも止めなければと思っていただけよ」

ディアドラは、遠ざかる魔王軍を警戒交じりに見送る友軍の姿に秘かに安堵した。こつそり麻痺作用のある花粉でも振り撒こうかと、思考の片隅で考えていたところだ。

あるいは視界の届く範囲に作用するセリナの魔眼でもいいだろう。

うっかり花粉が風に流れたと言えるディアドラに比べると、セリナの魔眼は効果を誤って発揮したとするには苦しいところがあるが。

「ドランさん達、すぐに戻ってきますかね？」

ディアドラの思惑を知らないセリナは、ドラン達の帰還が待ち遠しい様子だ。

堂々と魔王軍の真ん中を通ってきそうなドラン達だが、撤退中の魔王軍の兵と余計な諍いを起こす真似はしないだろう。多分。

「すぐに戻ってくるでしょう。私達は殿下や本陣から指示がない限りは現状を維持しましょうか。命令を無視して飛び出す困った子がいないとは限らないもの」

「うーん、確かに。終わりの見えた戦いを続けられても困つちやいますもん」

「魔王軍を根絶やしにしたいわけではないですもの。あっちの本国を占領したわけでもないし、またいざれ再挑戦してくるかもしれないけど、数年は平穩を保てるでしょ」

「数年だけですか？」

もうずっと平和でいいのに、と嫌そうな顔になるセリナにディアドラは微笑を浮かべて答える。

それでもセリナはドランより一つ年上だというのに、ドランやディアドラを含めた周囲に甘やかされているからか、時折、幼い仕草を見せる。

「貴女の子供っぽいところも、母親にでもなれば変わるかしらね？ この後の交渉次第でもっと延びるかもね。流石に交渉の場に私達が立つことはないでしょう。今回の勝利の立役者であるドランとクリスなら呼ばれる可能性はあるから、彼らによく頼んでおいたら？」

ディアドラはセリナに答えながら、今回の戦いの後について考えを巡らせる。

もともと人間とは距離を置いて暮らしていた黒薔薇の精だが、なかなかどうして人間に対する理解や洞察力は優れている。

呑気なところのあるセリナに比べると、人間社会に対する理解と予測の正確さはずっと上だ。

そしてディアドラは、この後の施策について自身の思いつきを述べる。

「そうね。暗黒の荒野からベルンまでの間に作った砦はいくつか放棄して、大きな要塞でも作るんじゃない？ ベルンまでの間に防壁らしきものが何もないのは問題よね。費用の捻出とか資材の手配は難しいかもしれないけど」

「でもベルン領って、幸いお金と資材の貯蓄はありますよね？ それでも要塞の建築となると流石に厳しいですか？」

「今回もそうだったように、王国や他の諸侯とも連携して対処しないと大変でしょう？ ベルンはまだ、クリスが負担を受け入れて要塞建築の費用を出すわね。でも他の諸侯はそこまでお人好しではないでしょう。今回の戦争で新たな土地を得られたわけでもなし。モンドウス・カーヌス相手の戦争は利益が少なくと痛感させられたから、充分な対価を見込めない要塞建築なんて事業に、どこまで協力的になるものかしらね？」

もう二度とモンドウス・カーヌスとの間に戦争が起きないと確証が持てるのなら、要塞なんでものを建築する話が出てこないだろうが、魔族の気質を考えれば、誰もそんな確証を持ってまい。

「今回は防衛戦争でしたものね。一応、私達が勝ったからモンドウス・カーヌスに賠償金とかの支払いを求める権利はあるでしょうけど、うーん。あちらもまだまだ余力を残しているから、あまり無茶な要求は出来ないうすよね」

「勝ったとはいえ、軍隊としての実力はあちらが上だって、はつきりと分かっているもの。どう駆け引きをして戦後処理をどこで終わらせるのか、殿下に期待ね。だいたい責任重大な期待になつてしまふから、少し申し訳ない気もするわ」

魔王軍の規模と質を考えたら、ベルン領という例外がいなければ、アークレスト王国とロマル帝国が勝利するのは極めて難しかっただろう。

仮に退けることが出来たとしても、壊滅的な被害を受けたことは想像に難くない。

ディアドラは疎いなりに政治について考えを巡らせ、溜息交じりに艶やかな唇から言葉を漏らした。

「た・ら・れ・ば・の・可・能・性・を・持・ち・だ・す・も・の・の・か・し・ら・ね・え、政治の場って」

戦場でならいくらでも力を貸せるが、政治的な交渉の場となればディアドラはもちろん、クリステイナーやドランだってどれほど役に立てるものか。

ともすれば戦闘が終わった後の方が、ベルン組からすると厄介な戦いとなるかもしれない。

そんな予感にディアドラは、その妖艶な美貌にうつつすらと影を帯びさせるのだった。

†

そしてムンドウス・カーヌス国を束ねる魔王ヤーハームの降伏宣言を聞いたドラン達は、魔王軍が前線を下げて本陣中枢に集結するのを見届け、アークレスト王国本陣へと帰還する運びとなった。クリステイナーとヤーハームの一騎討ちの最中、ドラン謹製の魔法の鎖で拘束されていた魔六将は、拘束を解かれるや否やヤーハームの治療を優先し、ドラン達に挑みかかろうとはしなかった。

そんな中でも偽竜の女王マスフェロウなどは、牙を噛み砕かんばかりの形相だった。しかし、自分達の認めるヤーハームが全面的に負けを宣言している以上、その決断に異を唱えることは出来ないと彼らは理解している。

それは魔六将だけでなく末端の兵士に至るまで同じで、凄まじい激闘の跡が残る本陣中枢の惨状に息を呑みながら、自分達の王を打倒した人間の勇者達に賞賛と闘志の混じる目を向けている。

魔蜘蛛クインセの糸で傷口を縫合しているヤーハームに向けて、刃を収めたクリステイナーが敬意を含む声で尋ねる。

ヤーハームは戦闘を好む面倒くさい性根の魔王ではあるが、卑劣でもなく、残虐でもなく、一個人としては嫌いになり切れないのがこれまた厄介であった。

戦わねばならないのなら、好もしさなど欠片もない相手の方が戦いやすい。

「戦闘の停止は前線にまで確かに伝わっているようで何よりです、ヤーハーム陛下。後ほど、終戦協定を締結する為の使者の派遣をお願いいたします」

「ああ、俺が向かいたところだがこの傷では厳しい。俺の代理として相応しい者を派遣しよう。くくく、しかし、貴殿はいつたいどういう氏素性の者なのか。先ほどの一撃は神器の鎧を斬り裂き、俺の肉と骨ばかりか靈魂にまで凄まじい衝撃を与えたぞ。片方の剣は見事な業物だが、人の手で鍛造出来る範疇だ。しかしもう片方は付喪神としても奇妙な代物だ」

業物と呼ばれたクリステイナーの愛剣たるエルスパードは、高名な魔法鍛冶師が人生最高の傑作とするべくして鍛え上げたものだ。

とある国で「より上位の、より優れた」という意味のエルと刃、剣を意味するスパードを組み合わせて、エルスパードと名付けられた。

「我が人生においてこの一振りこそが剣と呼ぶに相応しい。これまで打ってきたものは剣の形をした金属の塊に過ぎない」

魔法鍛冶師はエルスパードを完成させた三日後、精魂尽き果てた姿で最後にそう言い残し、満足そうな笑みを浮かべて命の灯を消したという。

シンプルに「優れたる剣」と銘を与えられたエルスパードは、地上世界最強格の剣士たるヤーハムの目からしても、名剣と惜しみない賞賛を与えるものだった。

しかしドラッドノートはと言うと、わけの分からない品という他ない。

いくらヤーハムでも、それが本来、剣ではなく、対古神竜ドラゴンに特化された上位存在を討

滅する為の決戦兵器であるなどと分かるわけもない。

ましてや遙かな太古の時代に、技術の隔絶していた超古代文明が七つに及ぶ並行宇宙を犠牲にして開発したなどと、ヤーハムにしても荒唐無稽と感ずる背景のある品だった。

比喩ではなく、その性能を全開にすれば宇宙一つを滅ぼせる超兵器も、古神竜ドラゴン自身が死を受け入れたからこそ彼を討滅出来て古神竜殺しの因子を獲得するに至っている。

そしてそのドラッドノートを使用したのは、勇者セムト直系の子孫であり、その因子を受け継いでしまったクリステイナーだった。

だからこそ彼女は、ドラッドノートと合わせて古神竜殺しの因子を攻撃に転ずるといふ、神々でさえ顔が青ざめる反則技を成し遂げたのだ。

土壇場の思い付きを無事に成功させたクリステイナーは、付け焼刃は付け焼刃でも世界最強の付け焼刃だったなど、わずかに自嘲めいた笑みを浮かべて魔王に答える。

「どちらも私の体の一部に等しい相棒ですよ。とても大切な存在です」

ドラッドノートが小刻みに震えて鞘からカチャカチャと音が零れる。歓喜のあまり身もだえしているらしい。

もしエルスパードに意識があったなら、自分よりも遙かに格上で年長のドラッドノートの様子を見て、きっと呆れたに違いない。

「そうか。どんな由来や来歴があるにしろ、戦場で命運を共にする武器ならば、半身にも等しい。その気持ちは俺にも分かる。次の機会が巡ってくるまでに俺もさらに腕を磨かねば……つう、まったく、こんなに痛みを味わうのはいつ以来だ」

笑みを浮かべようとしたヤーハームだったが、斬り裂かれた自分の肉体と魂の発する痛みを顔で強張らせる。

それを縫合しながら治癒を施しているクインセが諫める。

そんなクインセは小指の先に乗るくらいの元々の大きさに戻っていた。

クインセは魔王軍側ではトロール族の長トラウルー共々、戦闘が終わったことに安堵している者の一人だろう。

クインセは、かつて交戦した際に、戦いに向いていない性格だと見抜いたセリナがこの場になんかいいことにも、少しだけ安心しているように見える。

「本来ナラ話スナドモツテノホカ。今スグ治療ニ専念スルベキナノデスヨ、陛下」

「あまり口煩く言うな、クインセ。俺を打ち破った勇者を見送らなくては、俺の品位に傷がつくだろう？ さて、ムンドウス・カーヌスの王たるこの俺と魔六将を見事打ち破った、素晴らしき強敵達よ、恐るべき勇者達よ、堂々と凱旋するといい」

ヤーハームはそう言っただけで微笑みながら、さらに続ける。

「この大陸で俺達を堂々と正面から倒せる人類など数えるほどもおるまい。このヤーハーム、お前達との戦いを生涯忘れまい。再び戦場で見える時を胸を焦がしながら待つぞ」

「私としては二度と戦いたくありません。数々の過分なお言葉、この上ない名誉ではありますが、私は戦いに喜びを見出す者ではありません。つれないなどとお考えになりませんように。ただヤーハーム陛下に勝った名誉は確かに頂戴いたします。願わくは、私と私の子孫達と魔王軍とが、再び戦う機会が巡ってこないことを祈るばかりです」

「なんだ、つれないな」

恋人に手ひどく振られたようなヤーハームの表情と声音に、クリスティーナは隠すことなく苦笑を浮かべる。

「価値観の相違ですね。では、我々はこれにて。行こう、メルル様、ドラン、ドラミナ」

そう呼びかけてからアークレスト王国本陣へと向かうクリスティーナに続いて、魔六将や周囲の兵達を警戒していたドラン達も歩き始める。

今すぐ転移魔法で帰還してもいいが、ヤーハームが言ったように堂々と凱旋することにしたよ。うだ。

未だ戦闘可能な兵士達が十万近く残る魔王軍の中心を通って、堂々と。

ヤーハームが敗北を受け入れて戦闘停止の命令を発しているとはいえ、クリスティーナの胆力は

途方もないものであった。

もつともドラランとドラミナはとつくの昔から知っていたことだけれど。

クリステイナ達とは反対に前線から戻ってくる魔王軍の兵士達は、恐れる様子など欠片もないその姿に、あれが我々の王を討った強者かと、畏怖と畏敬の眼差しを向けていった。

「流石に規律が行き届いているな」

先頭を行くクリステイナが、いつでも彼女を庇えるように右隣りを歩くドラランに小声で囁きかけ、ドラランも小さく頷き返す。

「魔王殿の統率力もあるだろうが、彼らの文化がそうなのだろうね。強き者には敬意を払うのが当たり前。ましてや自軍の最強格である魔王ヤーハームを堂々と打ち破ったとなれば、不意を突くなら数を頼みにするなりして襲い掛かるような真似はしないさ」

二人の背後を歩くドラミナも形なき神器ヴァルキュリオスと長槍の神器グロスグリアこそ手放さずにいるが、魔六将と戦っていた時のような警戒は緩めている。

もちろん光の速さの攻撃に襲われたとしても、その霊格の高さから、物理法則を超えた速度の反応が出来る彼女ならば迎撃は可能だ。

仮に宇宙からの砲撃であっても、ドラミナならば防衛も反撃も容易い。

かつて大魔導バストレル率いる魔導結社オーバージーンに襲われた時、遥か天空から砲撃を加え

てきた人工衛星を地上からの攻撃で破壊した実績は伊達ではない。

「相手が卑劣な真似をするもよし、策を弄するもよし。自分達は自分達の戦い方をする、魔王軍にはそんな気風がありますね。質と量が伴い、上から下まで思想的な統一もなされている。これは手強いわけです」

そう言うドラミナは魔王軍をどこか羨んでいるようだった。

かつてバンパイア六王家の内、四家が敵対したことで母国を滅ぼされた彼女としては、思想的な対立のない魔王軍ひいてはムンドウス・カーヌスという国のあり方に思うところがあるのだろう。

実際のところは、古豪の老魔族ザンダルザは魔王の座を狙ってヤーハームの首を獲ると公言しているし、他にも魔王の座を求めて力を蓄えている者が複数いる。

ただムンドウス・カーヌスにおいては、魔王とはすなわち最強の存在であることが求められる。自らこそがムンドウス・カーヌス最強であると証明出来ない方法では、魔王と認められないと誰かが承知しているから、ドラミナのような悲劇に見舞われる可能性もない。

そこまでの理解と推察をしているから、なおのことドラミナはやるせないのかもしれないなかった。バンパイアという種族の中にあつて、仇敵ジールはとびきり残酷かつ極悪な存在であったが、異端ではなかった。

吸血という、生態の為に人間などの吸血対象を食糧と見なす傾向にあるバンパイアにおいて、人

間などの他種族を対等に扱っていたドラミナこそが異端だったのだ。

結局のところ、ジオールの凶行がなかったとしても、多くの同胞達と価値観を違えていた自分が女王である限り、いつか破綻が訪れたのではないかという考えを、ドラミナは心の片隅に抱えていた。

もつともすでに国が滅んでから時が過ぎ、今はベルン男爵領で生きている身である。

故郷では、バンパイア六王家の支配とは異なる新たな統治体制が敷かれている。

今更、過去の統治体制を蘇らせるつもりなど欠片もないドラミナにとっては、それは考えても仕方のない、しかしきつと最後まで忘れられない小さな棘のような考えであった。

そんなささくれのような、小さな痛みを忘れてはならないものとして抱え続けているドラミナの心中など知らず、一番後ろを歩くメルルが三人の背中に話しかける。

ザンダルザとトラウルーを相手に何度も肉体を消し飛ばされながら、戦闘の終わった今となっては傷一つないメルルは、魔六将から人間を辞めていると太鼓判を押されているとはよもや知るまい。実際、魔王軍との数々の戦闘の末、今のメルルは人間としての霊格の壁を越えて、真に超人と呼ぶべき存在にまで達しているのだから。

その一方で、感性のほとんどは常識人のままなのが彼女の魅力であろうか。

「今回の終戦協定で一応、アーケレスト王国とロマル帝国が勝利者になるから、こちらに有利な

条件を結べると思うけど、どれくらい平和になると思う？」

メルルには宮仕えの意識はあるし、愛国心もそれなりにある。

魔法使いとしての戦力のみならず、魔法に関わる政策や研究も職務の内であるから、終戦についてドラン達の考えを聞きたいようだった。

戦闘面だけでなく、領主としての政策についても、時折、常識外れのことをしてかしているベルンの面々の意見に興味があるのだろう。

それに、流石のメルルも全力で魔法を使い続け、何度も原形を失いかけた肉体を復元した影響で心底から疲弊しており、ふとした拍子に気を失ってしまいうさだった。

その為、大急ぎで魔力を回復させながら、ドラン達と喋って意識を保とうとしているのだ。

「どうでしょう。十年か二十年か。ヤーハーム殿の傷が完治するかどうかは、あちらにどれだけの腕前の医師と術者がいるかにもよるでしょう」

ドランはメルルを振り返りながら、思い浮かんだ考えを列挙してゆく。

「彼らの先祖が魔界から地上に持ち込んだ神々の秘薬か、軍神サグラバスに奇跡を願えば、思いのほか早く回復する可能性もあります。ただそれでも、すぐに万全の調子を取り戻すのは難しいでしょう。紛れもない神器の鎧を斬り裂いた、我が領主様の一撃はそれだけ特別なものでしたから」その特別の理由が、自分の自死にも近い古神竜殺しのおかげだから、ドランとしては何が功を奏

するのかわからないなあ、と呑気に考えていた。

見事に魔王ヤーハームに勝利した当のクリステイナはといえば、ドラランに前世の死の記憶を蘇らせて不快な思いをさせてはいないか、と一抹の不安を抱えているのに、気の利かない元童である。幸いだったのは、ドラランが本当に気にした素振りもないことから、これまでの経験上、クリステイナが気に病むだけ無駄だとすぐに理解したことだろう。

ドラランが気にしていないなら、私が気に病んでも損するだけだ、とあっさり割り切れるだけの付き合いが、彼らの間にはあった。

そして、ドラランの推測にドラミナが続く。

「魔王殿と魔六将に手傷は負わせましたが、魔族達と兵士達の多くはまだまだ戦える状態です。陸上戦艦の類はかなりの数を破壊しましたが、武器装具や食糧、医薬品などはまだ余裕があります。高水準でまとまった軍隊として、魔王軍はまだまだ力を残していますから、そこが気がかりですな」

そう言うドラミナの紅い視線は、周囲を整然と、かつ迅速に駆けてゆく魔王軍の兵士達へ送られている。

「終戦協定に戦闘を禁止する期間を定めないと、軍隊だけならすぐに送り込まれちゃうかもしれないってことになるかな？」

メルルが不安げに表情を曇らせる様子は、その気になれば魔王軍の兵士相手であろうと、百万でも一千万でも葬れるのに、虐殺を好まないというよりも、拒否する気質をよく表していた。

魔六将やそれに準ずる高位の魔族を相手にするならともかく、理不尽な虐殺にしかならない兵士達との戦いは、確実にメルルの精神を病ませるだろう。

「彼らが極めて質の高い軍隊であるのは紛れもない事実ですが、私やドララン、メルル殿が健在のところに軍勢だけ送り込んで意味がないのは、あちらも百も承知。それほど心配する必要はないと思いますけれどね」

ドラミナの推測に、メルルが腕を組んで首を捻りながら魔王軍に対する感想を口にする。

「うーん、魔王軍の人達は、なんとか占領とかはあんまり考えていないとか、重要視していないところがあるよね。より強い敵と戦う為に戦争をしているって印象があるから」

「私も同じ意見です。彼らは戦いを求めています。祖である神に誇れるような堂々たる戦いを、強い敵との血沸き肉躍る戦いを。領地を広げて、国と民に富をもたらすという考えを二の次にしていきますよ」

魔王軍を擁するムンドウス・カーヌスの魔王ヤーハームは、国を広げて裕福になることも、世界を制覇して歴史に名を残すという名誉も求めていない。

「王様だけがそうなら国民から反発があって反乱も起きそうなんだけど、あの人達は末端の兵士に

至るまで、全員がそうだよな？ ひよっとして国民全員？」

メルルの疑問にドラミナは答える。

「魔族の民ならばそうでしょう。トロールやゴブリンなどの敗北して統合された他の種族は、流石に違うでしょうけど。彼らは軍神サグラバースの眷属ではないですし、思うところもありましょう」

「多民族国家だからこそその軋轢か。ロマル帝国と基盤が似ているのかな」

「かもしれませんね。ロマル帝国も後継者問題がなければ、もっとまとまった戦力と指揮系統で魔王軍と戦ったことは間違いありません。可能性の話をしては仕方ありませんが、ロマルの方々こそ、魔王軍の侵攻はあまりに間が悪かったと、そう悔しがっておられるかも」

それに加えて南方での反乱だもんね、とメルル。

ロマル帝国では、崩御した皇帝の弟ライノスアート大公とその娘アステリアとの後継者争いに加えて、これまで数百年にわたって隷属を強いられていた諸種族による反乱まで重なったのだ。

それは帝国にとって建国以来の滅亡の危機だったと言える。

メルルは知らないが、アステリアの下に存在を隠されていた妹アムリアと共に、ドランの分身グヴェンダン達を帝国に向かわせているベルン領は、より詳細な情報を得ていた。

アステリアによる売国の計画は秘中の秘であるから、流石にメルルでも話すことが出来ないのは、

若干、もどかしかった。

「ロマル帝国ってこれからどうなるかな？ 今回の戦闘でかなりの消耗を強いられた上に、様子見していた反乱勢力がまだ残っているでしょう？ ライノスアート大公とアステリア皇女が同盟を組んでも、かなりの負担になる。鎮圧出来たとしても、新たな禍根が生まれかねないだろうし、後に尾を引くよ」

「統治には相当気を遣わなければならないのは間違いありません。そうですね、求められる以上のものを与えて宥めるか、今度こそ反乱を起こす力と闘志を失うほど徹底的に弾圧するか……」

これまでメルルとドラミナの会話を耳を傾けていたクリスティーナは、ドラミナの語る二つの方法から推測される未来を自分なりに想像して溜息を零した。

それは溜息なのが信じられないほど重い。

「そんなことをしたら、どれだけ恨みを買うか分からないな。私だったらすぐに胃に穴が開いてしまいそうだ。やはり私は徹徹さを求められるような統治者には向いていないんだろうね」

「それはそれでいいと思う……思いますよ。ベルン男爵はベルン男爵の統治を成されるのが一番良い結果をもたらすと私は思います」

「私を相手に遠慮する必要はありませんよ、メルル殿。共に死線をくぐった仲でしょう。私の方こそ、メルル殿には敬意を払うべき立場です。それにメルル殿のお言葉は私にとって、とても嬉し

「いものです」

「そう言ってクリステイナは微笑み、続ける。」

「私は私以外の誰にもなれませんから、私なりのやり方が最良であるなら、これ以上ありがたいことはありません。十年後や五十年後にどんな評価をされるのか、気にしながらではありませんが」

「ベルン男爵はあまり他人の評価を気にしない方だと思っていましたけど……」

「ほとんどの場合はそうです。ですが、領主としての評価となるとまた話は別です。私個人に対してなら気にも留めませんが、領主としての私に対する評価は、ベルン領とそこに住まう人々への評価にも繋がります。私の行いで私以外の人々が不当に低く評価されるのは、正直、耐えられませんが」

クリステイナの返答に、メルルは若い内から苦勞を背負い込んでいるなあ、といささか呆れ混じりに感心したようだった。

メルルがクリステイナと同じくらいの年頃には、魔法の研究に明け暮れつつ、それ以外は自堕落な生活をしていたものだが。

「生真面目が過ぎますね。確かに多くの人達の生活を左右するお立場ですけど、あまり思い悩むのも、精神の衛生によくありませんよ？」

「そうは言っているが、精神衛生に関してはメルルも人に注意出来るような生活をしていない。」

「少なくとも全力を出せる戦場であそこまで弾けて、正気を疑う言動を繰り返している内は、貴女がそれを言うのか、とドランやクリステイナに思われても言い訳は出来ない。」

「ええ。その点は自分でも気を付けています。自分だけで思い悩まずに優秀な秘書と補佐官をはじめ、頼りになる身内と家臣達と責任を分け合うように心がけております」

クリステイナはドランたちに感謝を伝えつつ、そう答える。

「ふふ、それなら大丈夫そうですね。ろくに知りもしない私が知った風な口を利くのはおかしいけれど、皆で協力し合っって気持ちがあれば、ベルンは大丈夫ですよ」

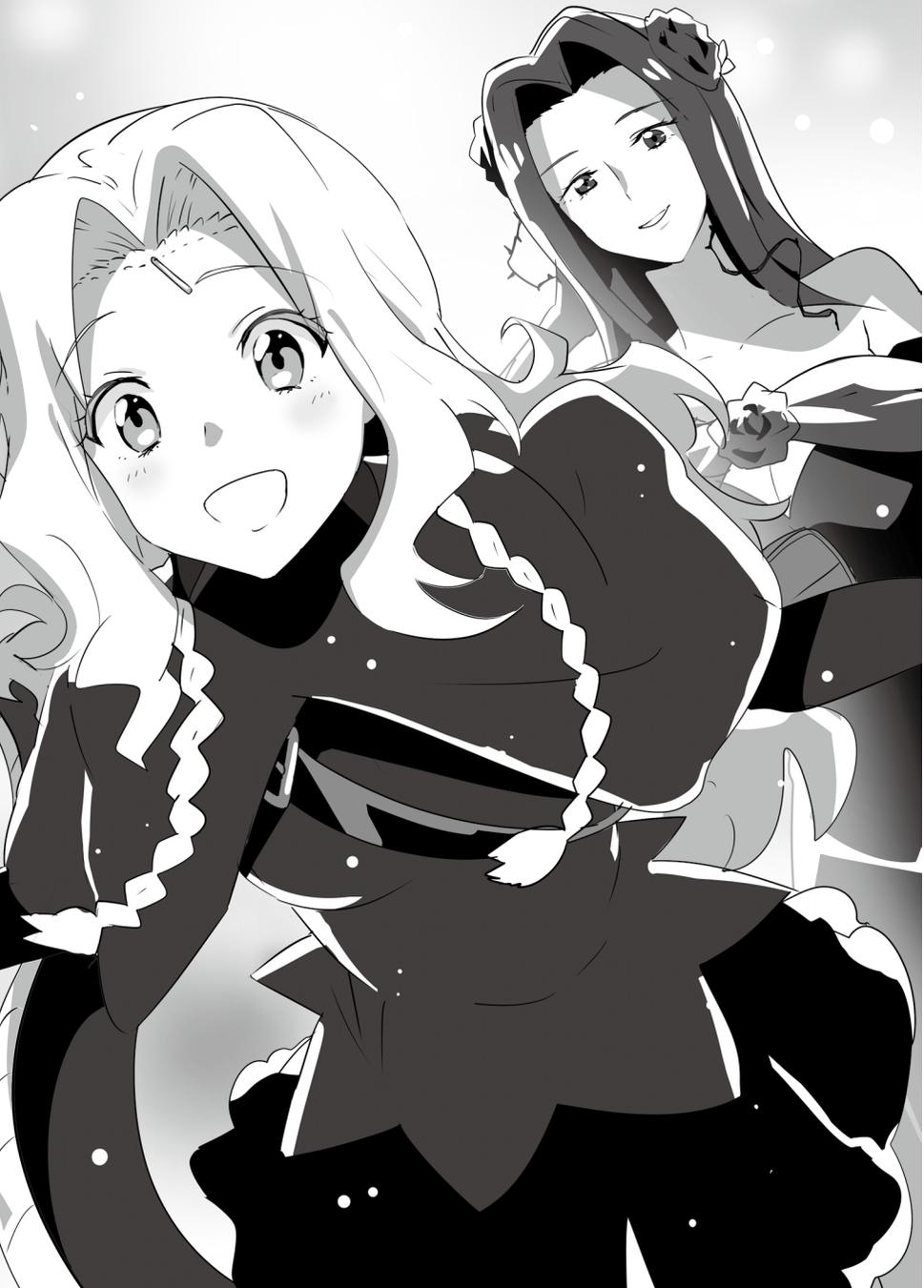
「ありがとうございます、メルル殿。ふふ、気が楽になりました」

先ほどまで人型生物として最高格同士の凄まじい激闘をしていたとは思えないぐらい、和やかな雰囲気は四人の間に流れていた。

戦いの熱と興奮が冷めて、明るい未来への展望に想いを巡らせたことが、彼女達の精神に穏やかな風を吹かせている。

「戦争は、始めるのは簡単ですが、終わらせるのは難しいものです。ただ、今回の戦後の舵取りはさらに難しくなりそうですけれどね」

しかしドラミナがしっかりと釘を刺すものだから、クリステイナは気を抜けずに小さく肩を竦める。



「その時はこれまで以上に皆を頼るとも」  
「それが分かっているのなら、大丈夫でしょう。私も微力を尽くしてお助けしますよ」  
見放されることはないと分かっている、ドラミナにそう言ってもらえると、やはり安心するクリスティーナだった。

+

地平線の彼方から昇ってくる太陽の光によって、戦場の無残な光景が照らし出される中、無事な姿で帰還してくるクリスティーナ達を最初に見つけたのは、もちろんセリナとディアドラだった。同胞のラミアと植物の精達は前線のアーケレスト王国軍と合流していて、最低限の警戒網を残しつつ休息を取っている。

これほど大規模かつ強大な敵との戦争は、ラミアと植物の精達にとって初めてのことで、セリナとディアドラという種族の限界を超越した同胞がいたとはいえ、両者の心身は疲弊の極みにあった。そんな同胞から見て、あれほど膨大な魔力を繊細に行使した後だというのに、汗一つ流していないセリナとディアドラの姿は、自分達とは別の種族なのだと思わされるものだった。

そんなセリナとディアドラからしたら、たった今迎え入れたドラミナ達四人には方が一にも勝てる

とは思えないので、彼らの方が本当の超越者だと、何故か胸を張って告げることだろう。

「ドラランさん、クリスさん、ドラミナさん、メルル様、皆さん、ご無事ですね！ よかった〜」  
心の底から安堵した様子のセリナが浮かべる明るい笑顔に、ドララン達も戦いの緊張の残り香のよ  
うなものを捨てて、柔らかな笑みを浮かべる。

今はまだ戦場の只中だが、その危険性を一時でも緩ませるぬくもりがセリナの笑みにはあった。  
「ああ、ほんの数時間ほど前に分かれたばかりだというのに、随分と久しぶりに会ったような気  
になるな」

「戦場の雰囲気がいま以上に居心地の悪いものだったから、セリナの雰囲気懐かしく感じられるの  
だろうさ」

ドラランが面白そうに口にすれば、クリステイーナも同じ心境だったらしく、小さく笑いながら同  
意する。

初めて会った頃と比べて、セリナの実力は桁違いに上がり、恐怖を乗り越える勇気も持つよう  
になった。

それでも、あの小心さと、見る者の心を和ませる笑顔と柔らかな雰囲気は相変わらずだ。

セリナの笑みを見るだけでも、ドララン達の心がどれだけ救われるか、この蛇娘は気付いていない  
だろう。

「納得だ。ディアドラもセリナが隣にいるからか、余計な緊張はもう抜けている様子だな。私達が  
決着をつけるまで相当な圧力がかかっていたはずだが、あの様子なら、被害を出さずに無事に戦い  
抜いてくれたようだ」

見事に仕事を果たしてくれた、とドラランは愛する二人の完璧な成果に、そしてそれ以上に傷のな  
い二人の姿に誇らしげに笑みを浮かべる。

今回の戦争の結果を左右したベルン勢は、より一層アーケレスト王国と周辺諸国から重要視され、  
警戒と危惧の念を深められるのは間違いない。

これまではドラランとクリステイーナが注目の的であったが、今回はドラミナに加えて、セリナも  
ディアドラも単独で万単位の軍勢と同等以上の活躍を見せている。

ドラミナはバンパイアという種族の危険性もあって、元より注視はされていただろうが、セリナ  
とディアドラにも煩わしい監視の目が注がれるわけだ。

もっともあまりに不躰な視線を許すドラランではないし、監視者達の努力は無駄に終わる未来しか  
ないけれど。

一段と色濃く消耗しているメルルに加え、ドラミナとクリステイーナにも疲弊の色が見えて、  
ディアドラは、魔王軍が本場に強敵だったことをしみじみと感じていた。

ドラランは論外として、クリステイーナ達があれほどまでに消耗を強いられる相手なら、やはりセ

リナと自分には荷が重い相手だったろうと、彼女は推測した。

セリナとディアドラとて、魔王将相手なら勝機を見込めるが、一対多を得意とする傾向にあるから、今回のように少数の味方と共に敵の中核となる存在の首を狙う戦い方では本領を發揮しづらい。だからこそ、前線に残って友軍を守りながら、攻め寄せる敵の大軍勢を受け止める役を担ったのだ。

「大役お疲れ様。魔王さんの命は取ったの？　そこまではしていない？」

ディアドラが物騒な内容を軽口の調子で尋ねると、魔王ヤーハームの相手を務めたクリステイナが答える。

「戦闘不能にまでは追い詰めたよ。そこで戦闘は終わりさ。戦闘の停止命令を出してもらえたり、決闘と戦争の敗北のどちらも認めているよ。今頃は手当しているだろうが、そう簡単には治らないはずだ」

ドラッドノートの助力ありとはいえ、今の彼女は、先祖代々受け継いだ古神竜殺しの因子を使いこなし、ついに制御出来るようになった。

つまり、この惑星の人型生物最強格の中でも上位だが、当人は自覚もないし、自覚しても特に喜んだりほしくないだろう。

そしてベルン勢の六人は合流して、そのまま本陣中枢の浮遊戦艦<sup>ふゆうせんかん</sup>を指して改めて歩き始める。

一刻も早く本陣に報告を上げるべきではあるが、ようやく合流出来たベルン勢がお互いの情報交換と死闘の緊張を和らげる為に、話をしたがったのだ。

「ふうん？　魂でも斬った？　肉体は治っても魂に傷をつければ、そう簡単には動けないでしょ」  
クリステイナの報告を聞き、ディアドラがそう尋ねた。

魂を斬ると口にするのは簡単だが、特殊な魔剣や魔法の類を使わずに実行するのは、達人と呼ばれる人間でもほぼ不可能だ。

それが出来るのは、魂を斬ることに執念<sup>しつねん</sup>を燃やし、狂気的な修練を積み重ねた流派か、ごく僅かな天才中の天才くらいのもんだろう。

それを分かった上でディアドラが魂でも斬った、と尋ねたのは、クリステイナならばドラッドノートの力を借りずとも、自らの技だけで可能だと知っているからだ。

ちなみにドラッドとドラミナ、そしてメルルも可能であるから、ベルン勢はつくづく規格外の怪物揃いと言えよう。

「似たようなものかな。鎧の神器を纏っていたし、本人の魔力も闘気も凄まじいし、肉体も頑丈だし、で散々苦勞させられた。しばらくは素振りどころか剣を握るのも億劫<sup>おっくう</sup>なくらいさ。それでも殿下にご報告はしないとだけだね」

「流石に殿下への報告はさばれないわよ。求められた結果は出したわけだから、しばらくはお休み

をもらえるといいわね」

「どうか。領主としての仕事に休みはないから」

ディアドラに困った風に告げるクリステイナだが、ベルン領主としての仕事は義務と同時に生き甲斐でもある。

休みなしで働くにしても、そこまで嫌そうではない。

だがそんなクリステイナの様子を見て、ディアドラが忠告する。

「ほどほどになさいな。なにかの本で読んだけれど、戦いは終わらせるのが難しいけれど、終わらせた後はもつと難しいことが多いですよ」

「含蓄のある言葉だな。出来るならその通りだと実感したくないが、どうだろうか？」

本当にそうなりそうだと納得するクリステイナに、ディアドラが続けていった。

「難しそうね。魔王軍と終戦協定を結んだとして、その後の付き合いを考えないでしょ？ 暗黒

の荒野方面に向けて開拓を進めるのは、危険になってしまったわけだし」

ベルンがその領地を広げて開拓する余地が残されていたのが、北から北西へと広がる暗黒の荒野方面であり、そこに手を伸ばすと再び魔王軍との戦争が勃発した時、最前線になる危険性が増す。

その為、開拓を進めるのを躊躇するのはもつともな話だ。

クリステイナは人口増加の続くベルンを思いながら、開拓計画の見直しを余儀なくされた現実

を思い返し、うんざりといわんばかりの表情を浮かべる。

「戦費の確認をしたくないよ。殿下をはじめ、交渉にあたる方々には、賠償金を少しでも多くむしり取って欲しいものだ。まったく」

幸せが逃げてしまいそうな溜息が、またもクリステイナの唇から零れ落ちた。

そうして六人で話をしながら歩いていると、ほどなくして前線に布陣していたアークレスト王国の兵士達の姿が見えてきた。

その中から騎馬の団が土煙を上げてドラム達に向かって走ってくる。

ドラムが作り出し、その後、王国内で研究が進み、独自に発展した軍用ホースゴーレムに跨った騎士達三名である。

さらに彼らの横を、ドラミナに忠誠を誓う四頭のスレイプニルが並走していた。

騎士達は急いだ様子でホースゴーレムを走らせ、あつという間に距離を詰めてドラム達の前でホースゴーレムを止めると、軽やかに降り立つ。

「メルル様、ベルン男爵、ドラム補佐官、ドラミナ殿、突入隊の皆様はご無事であらせられるか？」

三名の内、年長の筆頭格らしい短く刈り上げた金髪四十歳前後の男が声を張り上げたのに対し、メルルとクリステイナが一步進み出て応じる。

ドラム達六人の中で最も地位が高いのがこの二人だ。

特にメルルは、これまで周辺諸国最強としてその名を轟かせていたことで、実際の人物像を知らない相手から強く畏怖されている。

目の前の騎士達もその口だったらしく、今回の戦争で、見た目からは想像出来ないとしてもない所業を立て続けにやらかしたメルルを、畏怖の念を込めて見ている。

「ええ。我ら四名、欠員なく帰還いたしました。また使命も無事に果たしています。すでに魔王軍が退いているのがその証拠です。殿下にご報告申し上げたいのですが、皆さんは殿下からの使者でお間違いないでしょうか？」

突入部隊を代表して騎士達に尋ねるメルルに、年長の騎士は畏まりながら答えた。

彼は一回りも年下のメルル相手に緊張を隠せない様子だが、自分が十万人いても勝てる相手ではないと、心底理解しているからだろうか。

「はっ！ 魔王軍の行動の変化と敵陣中枢での膨大な魔力の反応、そしてそれに付随する爆発や衝撃が収まったことから、メルル様達の戦闘が終了したと判断されました」

年長の騎士は震える声で続ける。

「魔王軍側から接近してくる人影と、セリナ殿、ディアドラ殿が戦闘態勢を解き、その人影へと向かったのも確認され、メルル様方の帰還であろうと、我らが確認の為に使わされたのです」

それから年長の騎士は、ドラミナへ鼻先を寄せているスレイプニル達へと目を向ける。

ドラミナと別行動になった場合、スレイプニル達は独自の判断で戦闘に参加するように指示を受けており、これまでの戦いの中で神馬の末裔に相応しい戦果を上げている。

騎士達のスレイプニルを見る目に、畏敬と感嘆の念が混じっているのは、それが理由だ。

「スレイプニル殿達が動き出したのも、皆様が帰還なされたと判断した理由の一つです。主人を迎えに行く喜びに満ちた横顔をしていらしたものですから」

これまでの戦果も相まって、人並み以上の知性を持つスレイプニルを相手に、騎士達の態度は丁重だ。

少なくとも霊格において、スレイプニル達はほとんどの人類よりも上であることは確かな事実だった。

スレイプニルの活躍に新たな微笑を浮かべるドラミナは、ドラン達を見回してこう告げた。

「この子達が戦闘以外でも役に立ったのなら、何よりです。スペリオン殿下をお待たせしてしまっていますね。ここからはこの子達に運んでもらいますよ。差し障りはありませんか？」

ドラミナ問いかけに騎士達は緊張で身を強張らせながら答える。

「いいえ。殿下のもとへ一刻も早く行っていただけののなら、それに越したことはありません。

殿下は変わらず浮遊戦艦アークレイにてお待ちです」

バンパイアの原点にして、至高の存在だった始祖の再来と謳われたドラミナは、その気品もさる

ことながら、大国の女王を務めた威厳を透明な羽衣はろものように纏っている。

その気品と威厳を感じ取って、騎士達は場違いなほど緊張しているのだった。

ただでさえ彼女は、長らく人類国家と交流がなかった龍宮国りゆうきゆうこくとの国交継続の為に極めて重要であり、今回の戦争で失ってはならない人物だった。

しかしそうであると同時に、命を懸けて戦ってもらわなければならない最高戦力でもあるという矛盾に、王国上層部は胃と神経をこれでもかと痛めたほどである。

騎士達はそこまで責任の重い立場ではないが、ベルン一行の無事の帰還は、アークレスト王国と他の国家との縁を繋ぐかすがい鍵かぎということくらいは理解している。

魔王軍撃退の報せこそ最も重大ではあるが、その次くらいには、ドランをはじめとするベルン勢の生存もまた重要なのであった。

戦争の勝利以外の面から見ても、王国の重要人物達の安否を確認出来たのはいいが、同時にあまり長く一緒にいたくないという、なんとも悩ましい相手がドラン達なのであった。

騎士達の内心の緊張を察しているのは、やはりドラミナくらいのもだろう。

彼女がずっと右手を上げると何もない空間から馬車が現れて、いつの間にかスレイプニルがそれに繋がれている。

ドランならば自分の影に収納用の異空間を作り出す魔法【シャドウボックス】を使うところだが、

あいにくとバンパイアのドラミナは目を浴びても影を落とさない。

彼女は収納用の魔法具か、遠方にあるものを空間を超えて引き寄せる【転送】の魔法を、意思だけで行使したのだろう。

「それでは私達はこちらの馬車で参りましょう。魔王軍もこちらも、これ以上は戦闘を起こさないでしょう。たとえ命令が行き届かなかったという建前の、不意の戦闘でも」

幸いと言うべきか、魔王軍とアークレスト王国、ロマル帝国の間には、世代を跨ぐような深い怨恨えんはない。

戦いの終了を認められずに攻撃を仕掛ける真似をする者は、まずいない。何よりすでにお互いの前線は大きく距離が開いている。

鎧型の神器ジークライナスを脱ぎ、いつもの赤いドレス姿になったドラミナは、自身の行動で戦闘は終わったことを表した。

ドラミナの意図を察したメルルも愛杖あいじょうの戦闘形態を解除し、ロープ姿へと変わる。

まあ、そのロープにも膨大な数の魔法が付与されているが。

そしてメルルは馬車に乗り込む前に騎士達に一言告げる。

「それでは私達はドラミナさんの馬車で向かいます。先導をお願い出来ますでしょうか？」

「はっ！ この上なき名譽であります。謹つとんでお受けいたします」

セリナとディアドラを含む六人がドラミナの馬車に乗り込み、賢いスレイプニルは御者なしでも、騎士達の誘導に従って歩き始める。

ドラミナの所有する馬車には内部の空間を拡張する魔法が施されており、必要に応じて、広さばかりでなく、内装や構造そのものが変化する変幻自在の馬車なのだ。

ほとんどの場合、ドラミナは馬車の外見に合わせた広さの内装にしているが、おしゃれな城館や堅牢な城砦にも等しい内装へも変更可能だった。

では今と言えば、大蛇の下半身を持つセリナも含めて、六人が余裕をもつてくつろげる広さに調整している。

備え付けの長椅子にクリスティーナ、ドララン、ドラミナが腰掛け、向かいにメルルとセリナ、さらにディアドラが一人掛けの椅子に腰掛けて、机を囲んだ。

なおセリナは例の如く下半身はとぐるを巻き、それに腰掛ける形だ。メルル以外はもうすっかり見慣れた姿である。

「まだ戦争が終わったわけではありませんが、激闘の勞いに喉を潤すくらいのこととしてはしても許されるでしょう」

そう言って馬車の主であるドラミナが手を上げると、再び虚空から茶器一式が出現し、机の上に音もなく並んだ。

それらは白磁に青い花を染め付けた美しい品だった。

そして六人は、緊張をほぐす効果のあるハーブティーを楽しむ。

張り詰めていたものが緩み、メルルはふにやっと全身で脱力した。

むろんどんな不意打ちや奇襲が来ても、対応出来るように備えているのは、変わらないけれども、「いやあもう戦った。戦った！ 一生分の攻撃魔法を使った気分だよ。これまで開発はしたけど、誰にも伝えずに終わると思ってた魔法が使えてよかったあ」

魔六将を相手にメルルが使っていた魔法を思い返し、ドララン達は確かにあれは他に伝えられないな、と同じ感想を抱く。

あまりに高度すぎて、メルル以外にあの魔法を使える魔法使いの数は片手で数えられるくらいだろうし、その破壊力から、地上での使用は禁ずるべきだ。

惑星破壊規模の攻撃を防ぐ結界の内部や宇宙空間、あるいは異世界など、被害を考慮しなくていい場所でのみ、ようやく使用出来る極めて危険な魔法ばかり。

ティーカップを置き、ドラランはメルルの晴れ晴れとした表情に優しげな笑みを浮かべて問いかける。

「もう一度、彼らが戦いを望んで来たならば、喜んで迎え撃たれますか？」

「私の力が必要な状況なら戦うけど、喜んだりほしくないかな」

「あれだけ楽しそうに笑っておいででしたのに？」

「あはは、あれは我ながらちよつと情緒がおかしくなっていたというか、なかつたことにしたいくらいだから……」

直接その場を見ていないセリナとディアドラも、これまでの戦いと遠目にも見えた異常事態からメルルがどれだけ発奮したのかをおおよそ察して、興味ありげにアークウィッチを見つめる。

メルルは自分以外の五人の視線を集めながら、自問自答するように口を開く。

「まあ、その、隠し事が下手だし、誤魔化そうとしても仕方ないから言うけれど、確かに私は全力を発揮出来ない状況に、こう、鬱憤を溜め込んでいた」

最初にその鬱憤を爆発させたのが、去年の競魔祭の後のことである。

「去年、ドラン君に模擬戦を申し込んで、生まれて初めて全力を出して、それでも完膚なきまでに負けたのは、もう、一生忘れられない記憶だよ。負けちゃったけれど、あんなに清々しい気持ちになつたのは、初めてだったから！」

敗北の経験をここまで嬉しそうに語る人間も、そうはいないだろう。

メルルにとつて語れる相手は少ないが、彼女の弾んだ声音と口元に浮かぶ笑みが、何よりもそれが大きな喜びを伴う記憶だと雄弁に物語っている。

「ドラン君だけじゃなくって、その後にレニアさんにもドラミナさんにも負けちゃって。ふふふ、

私が全力を出しても勝てない相手が三人もいるなんて、ものすごく驚いたんだよ？」

ドランを魂の父と慕う神造魔獣の娘レニアとの戦いについて、明るく話すメルルにつられてか、ドラミナも当時の記憶を振り返りながら麗しい微笑を浮かべて答えた。

「私もメルル殿のような魔法使いがいたことには驚いたものです。戦いながら学習し、成長する速さと来たら。これは私も、うかうかしていられないとつい張り切ったものです」

「ふふふ、そっか。そういう風に思ってもらえたのなら、私も自分に自信が持てるな」

穏やかに笑うメルルの、魔王軍との戦いで見せた圧倒的な実力とは裏腹な印象に、セリナはなんだか疲れた気分になつてポツリと呟く。

「ドランさんに初めて負けた時のメルルさんでも、私は勝てる気はしませんよ。全身全霊を尽くして足止めが出来たら御の字じゃないでしょうか」

半竜半ラミア化を自在に扱えるようになった今のセリナでも、当時のメルルを相手にはまるで勝てる気がしない。

ディアドラも同じ気持ちでセリナの言葉に耳を傾け、時折、同意を示すように小さく頷いている。魔六将を相手に、互角かそれ以上の戦いを見せた二人にしても、魔六将を同時に相手どれるメルルは、まるで勝ち目のない格上の存在に違いないのだ。

メルルはセリナの実感の籠もった言葉を、一応褒め言葉として受け取ったようで、えへへと童女

のようにはにかむ。

その愛らしい笑みに心奪われた男がこれまでいなかったのが、不思議なほどだった。

ただしセリナとディアドラは、そんな笑い話じゃないんだけどな、とメルルのはにかむ笑顔の効果を受け付けていなかったけれども。

正直言ってセリナとディアドラは、二人掛かりでも今のメルルには勝てないと思っっているのだから、当然だ。

ハーブティーを半分ほど飲んだドランは、先ほどからひと際柔和な雰囲気になっているメルルに対して、ふと思うところがあり、率直に尋ねる。

「メルル様、もしやこれ以上は、戦いに用いる魔法について研究を控えるおつもりでいらっしゃるのですか？」

「あ、分かっちゃった？ ドラン君はよく見ているね。流石の洞察力だ。魔法使いは政治的な献策も求められるし、その洞察力は武器になるね。って、もう政務に関わっているから、今更かな」

メルルはティーカップに口を付けて、ひと呼吸置いてから続きを口にした。  
短くても次の言葉を口にするまでに、間が欲しかったのだろう。

「さつきも言ったけれど、もう一生分の攻撃魔法を使いつくした気分だから。それで分かったけれど、私は鬱憤が溜まっていたから、全力を出すのが楽しくって仕方がなかった。うん、清々しいく

らいに。でも」

セリナもディアドラもドランも、誰もが彼女の次の言葉をじつと待つ。

きつと、彼女のその本音を聞き届けられるのは、この場にいる者達だけだろう。

ドラン達以外には、メルルも自分の心情を語りはずまい。

アークウィッチの称号を与えられ、長らくアークレスト王国の防衛の要を担っていた責任を、メルルなりに理解している。

そんなメルルが弱音を吐ける相手など、ごく限られているのだから。

「私は戦いそのものが好きじゃないって、よく分かったよ。魔法を研究するのも開発するのも好き。あれだけ戦えたんなら、もう今後は戦いの為の魔法は使わなくても構わないって気分」

そう言うメルルの顔に偽りの色はなかった。  
その言葉通り、数多開発した戦闘用の魔法を残りの生涯で一度も使うことがなくても、彼女は後悔しないだろう。

「そうですね。陛下や殿下もメルル様の心情を慮ってくださるでしょう。実際に戦いが起きるまでは、メルル様が好きになさるのをお認めくださると思いますよ。鉛と鞭の使い分けが巧みな方々ですから」

聞きようによっては、いや、そうでなくとも不敬なドランの発言は、悪戯めいた微笑を伴って